

日本語・中国語の翻訳 に於ける問題点について

張 愛 平

[キーワード]

同音異義語、使役受け身、慣用句の翻訳、うどの大木、猫に小判

はじめに

日本語を中国語に翻訳する際に直面するさまざまな問題点は、風俗、習慣、発想法、国情の違い、地理上の位置による風土の違いなどに起因する。小論では中・上級用日本語テキスト《日本社会再考》の翻訳に際し、問題になる箇所を指摘し、私見を述べてみたい。

1. 社会情勢の違いにより、語彙の意味が異なる場合

まず『イショク足りて礼節を知る』という文を例に挙げてみたい。

原文：『新聞に「投書欄」というのがある。ニュースや専門家の解説などとは違って、そこには読者の率直な声そのまま載ることが多いので、私は読むのを楽しみにしている。』

中国語訳：（印刷の都合上、翻訳文は日本語の漢字を使用することとする）

『“足衣食知礼節”

報紙上設有“読者来信專欄”。該欄目与新聞和專家解說不同，在這里，大部分是原封不動地刊登読者坦率的心声，因此，我把読这一專欄作為一種樂趣。』

日本語の『投書欄』を、中国語の『読者来信專欄』とした。中国の新聞にも、当然のことながら、日本の新聞の投書欄に該当するものは存在する。しかし、日本の三大新聞である朝日新聞、読売新聞、毎日新聞などの投書欄に載るものを通読すると、中国の投書欄とは趣を異にすることに気付く。最近の日本の新

聞の投書欄は、長期政権であった自民党の一党独裁体制が終焉し、混乱期にある社会情勢を反映してか、政治に対する率直な意見が見られる。朝日新聞1994年12月7日の『投書欄』に掲載されている『自己保身政治もうんざり』という投書から少し抜粋して見よう。

『五十五年体制を改革するという大きな目標でスタートした政界再編も、このところ自社さ連立政権、新進党結成、小選挙区制といった一連の変革の中で、その先行きがすっかり不透明になってしまった。』

『最近の国会議員の動きをみていると国民不在の政治といって過言でない混乱ぶりである。』

『それが政治、といってしまうえばそれまでだが、私たちからみると、それぞれの動きが国家、国民を忘れた自己保身のための野心と怨念（おんねん）と利害のからんだ動きしか考えられない。こんな政治はもううんざり。

愚直な政治家よ、どこにいる。』

これは現在の日本の政治に対する不満を訴える投書である。しかし中国の新聞の『投書欄』において扱われる内容は上記に類似するものは、ほとんど見られない。もちろん、社会情勢の相違により、多少の違いがあるのは当然である。そういう意味において、『投書欄』をそのまま中国語に翻訳した場合に、それを読んだ中国人が想像するものと、実際の日本の新聞の投書欄に微妙なズレが生じるのはやむをえないことなのかもしれない。

《日本社会再考》の第一課に取り上げられている投書、及びそれについての解釈の翻訳は以下の通りである。

2. 同音異義語の問題

原文：『今朝も朝食の後、新聞を広げていたら、こんな投書が目にとまった。

現代の「イ」

中学1年生の漢字のテストの採点をしていたら、「イショク足りて礼節を知る」の「イ」に住居の「居」をあてた答案が続出。さすが東京の子だと、思わず花マルをつけたくなった。

地方出身の私は中学時代、「医食」と書いてしまった記憶がある。

(礼節を知りたい教師 29歳)

このことわざは、「衣食足りて礼節を知る」が正解。生活に困ることがなくなっちはじめて、人は礼儀に心を向ける余裕ができる、という意味。

着るものもなく、食べるものもなければ、礼儀に気を配るゆとりは持てない。まず大切なのは「衣食」、と昔の人は考えたのだろう。』

中国語訳：『今天早晨吃過飯，我照常翻開報紙来看，有這樣一封来信映入眼帘。』

現代的“イ”

在批改中学一年級学生的漢字試卷時，我連續看到這樣的答案，“イショク足りて礼節を知る”中的“イ”填成了居住的“居”。到底是東京的孩子，我禁不住想給打上个花形加獎号。

我出身于地方，記得中学時代，曾把“イショク”写成了“医食”。

(渴望知礼節的教師 29歳)

該俗語的正確答案應該是“足衣食知礼節”。其意思是說，人們不為生活所困，方能有余暇去顧及礼節。

如果既无吃又无穿的話，就不能有閑心去注意礼儀。古人大概是考慮最重要的還是“衣食”吧。』

上の投書は『衣食足りて礼節を知る』ということわざがある。それはもともと、中国古代の有名な政治家である、管子という人の名言であり、今では耳にすることは稀にしかない。しかし、日本の中学校の先生が投書にこれを引用しているのは、中国人にとっては、実に親しみを感じさせられる。因みに、日本で使用されている中学国語の教科書には、多くの唐詩が載り、今更ながら中国文化の日本社会への影響の深さを思わせられる。時代の変遷につれ、中国では既に死語となりつつあるこうした格言が、現代の日本の社会で生きつづけていることは実に興味深い。それも、国語教育の中で学生時代から中国の詩文に馴染んできた教育効果と言えるのではないだろうか。

日本語には、多くの漢語が含まれるが、中国語との決定的な相違は、同音異義語の多さであろう。日本の中学生が『衣食』に『医食』とか『居食』などと当てたのは、同じ発音をしている漢字が多いことにより起こった、同音語の問題である。『衣食』の『衣』と同じ発音をしている漢字は、『医、居、井、威、猪』などかなりある。中国語では『衣』と『医』は日本語のそれと同じ意味で、発音も同じく『yi』（1声）である。けれども『居』は『ju』（1声）と、『井、威、猪』はそれぞれ『jing（3声）、wei（1声）、zhu（1声）』と全然別な発音をし、同音語ではない。もっとも中国語にも同音語の問題がある。例えば『男方』の『男』と『南方』の『南』はいずれも『nan』（2声）と発音しているので、漢字を当てる場合に文の前後の意味に拠らなければ間違いかねない。しかし、漢字の発音の面から比較すれば、日本の同音語とは違うものである。

この本文に扱われている投書は非常に短いものであるが、内容的に興味深い。ここで『花マル』という語句が登場し、翻訳に窮してしまった。高等の教師をしている日本人の友人に尋ねると、『「花マル」というのは、円の回りに花形をつける印で、生徒を奨励するために、よくできた答案や宿題に使われるものだ』、と絵を書いて教えてくれた。何と日本人と中国人の考え方が非常に似ているとか。中国の小学生の宿題にも、花形か可愛い動物形のスタンプを押すことがある。

3. 「居候」の解釈をめぐる

原文：『ところが現代の日本では、着るものに困る人などまずいない。その半面、土地の値段が非常に高いので、家を持たない人はざらにいる。「居」は「住居」とも書くように、住む場所のことを表わす漢字だ。「居間」は家族がふだんいる部屋のことだし、「居候」と言えば、他人の家に住んで食べさせてもらっている人のことをさす。

たしかに中学生の答案のように、住宅難の東京では、まず「居食」が大事と言いたくなる。この答案は、もっと広い家に住みたいと切実に感じている中学生が多い証拠だ。』

中国語訳：『然而，在当今的日本，大概不会有人因无衣穿而发愁的。而另一方面，因地价极高而无居舍的人却到处可见。正如“居”也写作“住居”一样，它乃表示居住场所之意。“居間”是指家人平日呆的房间，而“居候”则是指寄居在他人家中，白吃饭的人。

確如中学生の答案一樣，在住房緊張的東京，我也想說“居食”是最重要的。該答案證明，有許多中学生都迫切希望住上更寬敞一些的房子。』

『居候』という語彙は中国語に訳せば『食客』となるだろう。だが、『食客』とは主に封建社会における貴族のところに寄宿している文人のことを指し、現代ではほとんど使われていない語彙である。『食客』は中国語でも、働かずに食べるだけという怠け者を皮肉る場合にも用いることがあり、『食客』と訳すのも考えものである。しかし、『食客』と当てることで、前後の意味が全く理解できなくなり、解釈が難しくなる。ここでは、そのまま『居候』と翻訳し、注にその意味を書く方が適切ではないかと考える。

4. 文法の面からの翻訳の難しさ

——使役受け身文を例に

原文：『しかし、この先生が中学時代に、「医食」と書いてしまったというのも、また考えさせられる。

きっと当時、この先生が住んでいたところには、医者がいなかった

のだろう。もしかしたら、無医村だったのかもしれない。急に病気になったとき、すぐに診てもらえる医者がいなかったら、とても不安だろう。

「居食」も「医食」も、現代の日本の社会からすれば、「衣食」よりずっと切実だ。辞書で「イ」をひくと、30くらいの漢字が並んでいる。同音異義語の多い日本語では、誤字も時には、その人の心理や意識を反映していて、おもしろいものだ。

中国語訳：『不過，这位老師說在中学時代曾写成了“医食”，也不能不令人深思。当時一定是这位老師居住的地方没有多少医生，或許是个无医村。当得了急病時，如果馬上請不到医生，就会非常不安。

無論是“居食”還是“医食”，从当今的日本社会来講，都比“衣食”要迫切得多。当翻開字典查閱“イ”時，会發現有30多个漢字排列着。在同音異義語繁多的日語中，錯字有的時候也可以反映其人的心理、意識，是非常有意思的。』

原文の『考えさせられる』は作者がこの投書を読んでの感想である。中国語で使役受け身文を訳す時、この場合には二通りの訳が可能である。一つは、『自発的に、思わず何かをする』という、幼い時に『住んでいたところには、医者があまりいなかった』という客観的な原因が前提となり、『イショク』を『「医食」と書いてしまった』、その先生の気持ちが理解でき、『その通りだ』と同感の気持ちを表わす、『是可以理解的』と翻訳できる。また主観的な願望ではなく、『やむをえず何かをする』という意味で言えば、中学時代に『医食』と書いてしまったということによって、『この先生の幼い時に住んでいたところには、きっと医者が不足であったのだろう』と考えずにはいられないということになるから、『不能不令人深思』という訳も考えられる。使役受け身文の『考えさせられる』を同感する気持ちと取るのか、自発と取るかで大分訳が違って来る。作者に問い合わせたところ、この場合は後者の意味であった。

5. 『慣用句』を翻訳する場合

——『うどの大木』を例に

諺や慣用句には人類に共通のものが多い。文化が違って、人間の行動に普遍的な側面があるからであろう。日本語と中国語も例外ではない。日中両国の文化は、昔から非常に密接なつながりがあるために、同源、同字そして同義の言葉が多い。例えば、以下の表現である。

日：『呉越同舟』 『一視同仁』 『朝三暮四』 『夜郎自大』

中：『吳越同舟』 『一視同仁』 『朝三暮四』 『夜郎自大』

漢字の書き方が多小の違う点を除けば、全く同じもので、何の異同もないのである。それらは、ほとんど昔中国からそのまま日本に伝わってきて、いまでもそのまま使われている成語である。

また、漢字の組み立てが少しだけ変わったものもある。

日：『日進月歩』 『粉骨碎身』 『千紫万紅』 『異口同音』

中：『日新月歩』 『粉身碎骨』 『万紫千紅』 『異口同声』

中国語を助詞や助動詞を加えて日本語の表現にしたもの

日：『疾風に勁草を知る』 『徳をもって怨に報ゆ』 『葉公竜を好む』

中：『疾風知勁草』 『以德報怨』 『葉公好龍』

同じ意味の諺、慣用句が中国語にも存在する場合、翻訳は容易である。しかし、これが「山の芋鰻になる」とか「花より団子」などのように中国語にない場合、翻訳は困難となる。こういった日本で生まれたと思われる慣用句や諺も日本語には多数存在する。

次に、主に『日本人もセイタカノッポ』という文に出る『うどの大木』という慣用句の翻訳について、もう少し論じてみたい。

原文：『「日本人、韓国人、中国人はとても似ていて、区別がつきにくいけど、たいてい一番背が低いのが日本人ですね」とアメリカ人の友人から言われて、なるほどと思ったことがある。特にそれぞれの国の平均身長を比べたわけではないが、概して日本人には背の低い人が多い。』

ところが最近電車などで見かける学生たちの背の高いこと。満員電車の中で、私などがつぶされそうになっているときでも、180cm以上もある若者たちは、頭一つ突き出して、涼しい顔で本を読んでいた。栄養状態が良

くなったせいだろうか。そんな長身の若者たちを、街でよく見かける。

1965年 中学3年男子の平均身長

158.3cm

高校3年男子の平均身長

166.8cm

1989年 164.4cm

170.5cm

(文部省学校保健統計調査による)』

中国語訳：『曾經有位美国朋友对我說“日本人、韓國人和中国人非常相似，很難區別。不過最矮小的，差不多要数日本人”。經朋友一說、我也曾認為的確如此。雖然并没有特意將各国的平均身高相互比較，但大体上，在日本人当中，身材矮小的居多。

可是，近来在電車上却經常看到个子高大的學生們。在客滿的電車中，象我这样的人几乎快被挤碎了的時侯，身高一米八十多公分的年輕人們，却高出他人一頭，以一副滿不在乎的表情，依旧看着書。也許是榮養狀況變好了的緣故，象那樣高身材的年輕人，在街上到处可見。

1965年 中学3年男子の平均身高

158.3cm

高中3年男子の平均身高

166.8cm

1989年 164.4cm

170.5cm

(据文部省学校保健統計調査)』

ここでは、『受け身形』の中国語と日本語の差異について述べてみたい。

本文中の『友人に言われて』は『言う』の受け身形であるが、日本語ではこういった受け身形が頻繁に使われる。中国語にも『受け身形』を表わす『被動句』という語彙が存在するが、中国語の文章には日本語ほど受け身形は使われない。この場合の『言われて』は、『被朋友一説』と訳せば、間違いはないが、訳文の痕跡が残り、少々堅い感じを与えるので、『経朋友一説』と訳すと、もっと受け入れやすいと思う。では、訳文を読みながら、検討を続けよう。

原文：『この24年間に、日本の若者たちの平均身長は4～6 cmも伸びている。この調査によれば、「中学生と高校生で180 cmを越える生徒は男子だけで11万9千人もいる」とのことだ。このまま平均身長が伸び続ければ、「背の低い日本人」というイメージは、若者に関するかぎり変わっていくことは間違いない。

さて、この背の高い若者たちだが、満員電車では優越感が味わえても、教室では体に合う机やイスがなく、長い足を窮屈に折り曲げて授業を受けなければならない。

「これではかわいそう」と、文部省は24年ぶりに机やイスの規格をあらため、180 cm以上の生徒用に特大規格を作ることにした。

これで、いままで窮屈な思いをしていたセイタカノッポさんたちも、ゆったり授業が受けられるようになる。』

中国語訳：『近24年間，日本年輕人的平均身高增長了4～6公分。

根拠这一調查得知，“在中学生和高中生中，超過180公分的学生僅男子就有11万9千人”。如果平均身高照此繼續增長，“身材矮小的日本人”這種印象，在年輕人範圍内，無疑會發生變化。

那麼，这些身材高大的年輕人，儘管在客滿的電車中品味到了優越感，可是在教室中，却因没有合体的桌椅而不得不拘禁地倦曲着長腿听課。

“這樣太可憐了”，于是文部省決定將改變持續了24年的桌椅的規格，制造適用於180公分以上身材的学生用特大規格桌椅。

這樣，至今一直感到很拘禁的大个子們，也將能够舒服地听課了。』

原文：『ところで、日本語には「うどの大木」という慣用句がある。「うど」という木は、丈は高いが、茎が柔らかいので建材には使えない。このことから、体が大きいは何の役にも立たない人のことを「うどの大木」とけなしたりする。反対に、体は小さくても、有能な人のことを「山椒は小粒でもぴりりと辛い」と言う。山椒の実は小粒でも非常に強い辛味を持っているからである。

日本の若者たちの背丈は伸びたが、中身はどうなのだろうか。

大学生になっても、物事を自分で判断できずに親や教師に頼ってしまう、自立心のない若者が多い。若者たちの平均身長伸びが、単なる「うどの大木」を表わしているのではなければよいのだが。』

中国語訳：『不過、在日語中有这样一个慣用句，叫作“参天大樹土当帰”。其意思是說，“土当帰雖長得高大、但因枝杆柔軟而不能用于建築材料，由此而把那些身材雖然高大，却毫无用處的人諷刺為“参天大樹土当帰”，反之，把身材雖矮小，却很有才干的人喻為“花椒雖小辛辣難当”。这是因為花椒的顆粒雖小，却具有非常辛辣的味道。

日本年輕人身材是增高了，可內在的能力如何呢？

有許多年輕人都成為大学生了，依然不能自己去判斷事物，而依賴于父母或老師，沒有自立之心。如果年輕人平均身高的增長不單是“参天大樹土当帰”就好了。』

この部分の翻訳で困難を感じるのは『うどの大木』である。《日中辞典》には『大而无能』、『大草包』と説明があり、比喩としての使われ方も同様である。『大而无能』は大きいけれど、能力がない、『大草包』も、大きい包みであるが、中身は草ばかりという意味である。内容的にはほぼ同じ意味ではあろうが、『うど』が中国では慣用句などには使われないため、比喩をそのまま中国語には訳せない一例であろう。

ここで『うど』を《日中辞典》により中国語訳に直すと、その後の説明文の訳を変える必要が生じてくる。

ここでは『うど』の説明を生かすことにし、『うどの大木』の訳は《日中辞

典》によらず、『参天大樹土当帰』と訳すことにした。『丈は高いが、うどのように役に立たない木だよ』という意味である。

日本語の諺や慣用句には、『うどの大木』のように、その前後の文脈によりそのまま中国語に置き換えられないものは多い。例えば、『猫に小判』は『対牛弹琴』と訳せ、牛に向かって琴を弾くこと、琴は古代の楽器で、動物にいくら高尚な音楽を聞かせても、その美しさが分かるはずはないという意味であり、『後の祭り』は、『雨后送傘』に当たり、雨が止んだ後で傘を送ること、間に合わず、無駄になるという意味である。また、『鵜のまねをするカラス』も中国語の『東施效顰』と同じ比喩に使われる。絶世の美女である西施が病気で眉をしかめるさまがとても美しかったので、同じ村の醜女である東施がその真似をしたが、もっと醜くなってしまったという古代の故事によるが、日本語の意味とは大分異なっている。

以上、『日本社会再考』のテキストから中国語訳を試みる際の困難点について、筆者なりの考えを述べて見た。

参考文献

- 1) 北京对外经济贸易大学・北京商務印書館・小学館 共同編集 《日中辞典》
小学館 昭和62年4月1日
- 2) 北京商務印書館・小学館 共同編集 《中日辞典》 小学館
1992年1月1日
- 3) 米山寅太郎・鎌田 正 著 《漢語林》 大修館書店 昭和62年4月1日
- 4) 尚学図書 編集 《慣用ことわざ辞典》 小学館 1月20日第一版第四刷
発行
- 5) 田中好夫 編集《読み、書き、話すための故事ことわざ辞典》 学習研究
社 1991年2月10日
- 6) 尚学図書 編集 《国語大辞典》 小学館 昭和五十六年十二月十日
- 7) 著作権所有 文化庁 《外国人のための基本語用例辞典》 大蔵省印刷局
昭和46年8月15日

- 8) 松村 明 編集 《日本文法大辞典》 明治書院
- 9) 王曰和 編 《日語語法》 商務印書館 1983年
- 10) 朱万清 編著 《新日本語語法》 外語教学与研究出版社 1983年 4 月
- 11) 国際交流基金 編 《教師用日本語教育ハンドブック》（文法 II）
国際交流基金出版 昭和55年 3 月